

文章論 —『文章練習帳』批判から—

● 土 屋 博 映

1. はじめに

コミュ文専門科目「文章」の授業を行い、文章の本質、また指導法につき、いささか思うところがあったので、本稿にまとめ、自己の今後の「文章」への姿勢と、指導法に役立てたいと考えた。

テキストとして用いたのは『文章練習帳』（岩波新書・大野晋）である。ベストセラーとなった名著であるが、あえて批判の姿勢を示し、あらためて、「文章」とは何か、そして究極の狙い、「文章指導法」とはどうあるべきか、を検討してみたいと考えている。

『練習帳』（以下、『文章練習帳』を『練習帳』と呼ぶ）の目次（構成）は、次のようになっている。

まえがき

- I 単語に敏感になろう
- II 文法なんか嫌い—役に立つか
- III 二つの心得
- IV 文章の骨格
- V 敬語の基本

配点表

あとがき

「まえがき」には、「ひととおりに読むだけでもこの本は日本語の理解と表現のために役立つところがあると思います。ゆっくりと辛抱強く、練習問題に答え、また作業をしていくと、その人が本来もっている言語の能力がきつと引き出されてくる。誰かといっしょにこれをして答えをつきあわせ、違った考えがあることを知るのも面白いと思います。もちろん独りででもいい。これはまた、

一つの知的な遊びにもなるでしょう。」と記されている。これを読めば、この本は、やはり『岩波新書』だけあって、教養書であることはあきらかである。「日本語の理解と表現のために役立つ」「一つの知的な遊び」というところが本音であろう。「辛抱強く」「きっと引き出されてくる」というのは、一般の文章の下手な読者にとっては無理な話かと思われる。

さて、各章の中で、文章上達に、『練習帳』で効果がある（かもしれない）と考えられるのは「Ⅱ」の「文法」を扱う章くらいであろう。次に、「Ⅰ」の「単語」を扱う章が、文章上達の効果のきっかけくらいにすぎない。「Ⅲ」の「心得」、「Ⅴ」の「敬語」は、本書からは除いたほうが、本当の文章を学ぼうという初心者には親切かと思われる。「Ⅳ」の「骨格」は、独力では無理である。

以上の苦言は、初心者が独力で文章の上達を目指すための苦言であり、ある程度の力のある者が、「文章」についての教養を身につける書としてはなかなかの良書だと記しておきたい。

ところで、「文」は個々の「文」であり、「文章」はそれの「寄せ集め」ではないから、「文」をいくらしっかり書いたとしても、文章が上達するわけではない。それをふまえた上で、まずは「文」をしっかり書く姿勢を持たせるのはよいことだ。しかし、「文」と「文章」を同一レベルでとらえたり、「文」を物理的に積み重ねると「文章」になるというような誤解を与えたまま、授業を展開するのは、避けなければならない、ということは「文章」担当者として、強く確認しておきたいことである。

「文」は『練習帳』で、かなりの程度まで、しっかりしたものが書けるようになる。ただし、「文章」までは、『練習帳』と言わず、どのような「文章」の書物を読んでも無理である。それを『文章練習帳』批判のまとめとしておく。

2. 「文」と「文章」

1で述べたように、当然のことながら、「文」と「文章」は同義ではない。まずは、便宜的に、「文」の定義を、「形の上で完結した、一つの陳述によって統べられている言語表現の一単位。通常、一組の主語と述語とを含むが、主語を欠くことも多い。構造上、単文・重文・複文の3種に分け、また、機能上、平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の4種に分ける。(以下略)」（『広辞苑』）としておこう。

また、「文章」の定義は、「文字を連ねてまとまった思想を表現したもの。(以下略)」（『広辞苑』）としておこう。

「文」は「言語表現の一単位」であり、「文章」は「まとまった思想を表現」したものである。これが「文章」を指導する側と享受する側の共通理解としてなくてはならない。

3. 「係り」と「受け」

日本語の文構造を考える上で、もっとも大事なことは「係り」と「受け」と考える。いろいろな学説があるが、橋本進吉氏の「文節」という考えが、シンプルであり、教師側では指導しやすいし、学生側でも享受しやすいと思う。日本語の「文」を分析（文節に分ける）し、それらの関係を見ていくと、いくつかの文節は連文節とまとめ、原則として、最終的には「連文節（文節）プラス連文節（文節）」という非常にシンプルな関係に還元されるのである。もちろん、初めの「連文節（文節）」は「係り」であり、後の「連文節（文節）」は「受け」となる。

繰り返すが、日本語の文章を書く上で、もっとも重要なのは、この「係り」と「受け」の関係を意識的に明確にしつつ、記すことにある。日本語の「推敲」とは、「係り」「受け」の関係が明確であるか否か、を第一におかなくてはならないのである。

『練習帳』での長所と言えるのは、文法のターゲットを「は」と「が」の2点に絞ったことである。結論を言えば「は」は係助詞、「が」は格助詞、それを同一視して「文」を書くことから、間違いが生ずるのである。大野氏は、それを（意図的に）容易には述べず、次から次へと「練習」をさせる。この辺りの指導法は、実に見事である。

究極の「係り」と「受け」は「象は鼻が長い」に集約される。しかし、初めからそれを提示したのでは学生のためにならない。それを導くプロセスを、真面目に受講していた学生の9割は、「文章」という科目で、「文」だけはしっかり書けるようになったと信じている。それは『練習帳』のおかげである。

4. 文章構成法

さて、「文」ほど「文章」は容易に書けるわけではないので、私は「形」から入ることを主張している。

まずは、「文章」を書く場合、原則として、「主題→具体例→結論」と、初めに構成しておくことが肝要であると伝える。

この場合、この原則は、書き手は初心者であり、およそ文学的表現とは無関係な、「レポート」的な「文章」を書くという場面」を想定する。

当然のことながら、「文章上達」の講義を聞くような姿勢（実力）で、作家などにはなれるわけがないからである。人を引き込むような面白い文を目標とするのではなく、自分の主張を明確に相手に伝え、納得させる文を書く、それが一般人・普通人への「文章」の指導する方向性だと確認しておきたい。

レポート作成にあたっては、結論を納得させるような「具体例」が大事であることは、毎回強調し、かつ、採点もそれをしつこく繰り返すよう意識している。

5. 「よむこと」から「かくこと」へ

「よむこと」は実に大事、「よむこと」により、よい文章の感覚がつかめ、語彙力が増す。「よむこと」が嫌いで「かくこと」がうまくなることはありえない。レベルが高い「文章」を書くには、背景となる、語彙・文化などの知識・教養が必要とされるのである。

そういう意味では、『練習帳』の「I 単語に敏感になろう」は、学んで損はない。ただし、『練習帳』の単語には限りがあるから、もちろんそれだけで十分ではない。「単語に敏感」になる「きっかけ」となるものだと意識することが肝要である。

したがって、学生には良書を沢山読むように指導する。「良書」の定義は、先生方が推薦するもの、ベストセラーになっているもの（「良書」というのは危険な場合もあるが）である。自分勝手に、好きな芸能人の楽屋落ちなどの偽エッセイなど読んで進歩はないことをしつこく伝える。

中身の薄い本は読みやすいが、自己の教養の進歩にはつながらないものである。

「良書」は語彙にあふれ、文化にあふれ、教養にあふれ、思想にあふれているもののことを言うのである。ちなみに「文章」が上達しない一因に、文章語である「古典」を学ばない（学べない・学ばされない）という要素があると、私は強く考えている。

だから、コミュニケーション文化学科の「演習」に、わざわざ「古典文学」

に関わるテキストを用いているくらいだ。

6. 「感想」から「評価」へ

「文」を書き、その物理的積み重ねではよい「文章」になどなるわけがないのだが、そうやって理屈ばかり考えていても進歩はしない。外国語を学ぶのに、机上の空論では進歩しない。語学は、会話も文章も、実践あるのみである。だから、「文章」の学習においても、とにかく「かくこと（書いてみること）」も必要なのである。完全主義ではうまくならない。何かを表現する場合、最初は主観的な感想文でかまわない。感想文を書くことにより、文を「かくこと」に「慣れる（怖くなくなる）」ことが大切なのである。それを、指導し、次第に、客観性をもった評論文的なものへと変えていくことが指導者としては大切なのである。

その点、「課題文」を与えて、要旨をまとめさせるという「文章」の講義をおこなったという大野氏の『練習帳』の見解は正しい。ただし、実践させなくては意味がない。授業はよいが、『練習帳』としては成り立つことは難しい。『練習帳』批判としては、それが書物の限界であるということを書いたかったのである。

7. 「文章」に才能はあるか

「文章」を書くということには「才能」はある、と一応言っておこう。

こんな話を聞いたことがある。外国に旅行したとき、目的地に近づいた時、飛行機の窓の外は雲で、視界ゼロなのに、同行者の一人が「今この飛行機は飛行場のまわりをまわって待機の状態だ」と断言したそう。しかし、それを聞いた友人は、そのような感覚がまったくつかめなかったという。事実は同行者の言ったとおりだったそう。

また、こんな教え子もいた。外国に一度も行かないのに、在学中に英検1級をとってしまったり、就職し、韓国に出張を数日しただけで、朝鮮語の日常語がスラスラしゃべれたりするという教え子だ。どうして語学が得意なのかという質問に対し「何となくわかっちゃうんですよ。」といとも簡単に答えてくれたものだ。

数学の得意な友人が、みんながどうして数学が不得意なのかかわからないと不思議そうに言ったことも記憶にある。

こういった例は枚挙にいとまない。頭がいいというよりも、生まれつきの「脳の特質」は存在するのだ。それが「個性」という切り口につながるのかもしれないが。

だから、脳が「文学脳（文才脳）」であれば生まれつき「文章」がうまくなる要素はもっているといえる。ただし、「環境」の影響も無視はできないと思う。本章の冒頭で「一応」といったのは、人間は「遺伝と環境」により成り立つものだからである。小さい頃に、昔話などを沢山読み聞かされ、絵本に没頭した経験も脳に影響するとすれば、「環境」も、文章を書く「才能」の一つに加えてもよいだろうと私は考える。

古代でも、紫式部、清少納言、などを考えれば、それは一目瞭然である。「学問」の世界を環境としたものが、文学的才能を持っているのは、「遺伝」だけとはいえないであろう。

「環境」も重要な役割を果たしていると思う。家庭で、子どもに昔話もろくに読まない親が、学校での子どもの「文章力」の成長を臨むのは本末転倒と考えるべきである。

『練習帳』を独力で読み、「文章」が上達するのは、「遺伝」かつ「環境」が整った学生に限られると断言しておいてよいと考える。

8. 「文学的」なものは才能、「評論的」なものは努力

「文学的」にうまい文を書くのは、才能だと考える。いくら努力しても誰でも芥川賞がとれるわけではない。どんなに努力しても、凡人が、100メートルで10秒を切ったり、マラソンで2時間10分を切ったりすることなどありえない。しかし努力次第で人並み以上に記録が伸びる可能性は高い。文章力も同じで、「評論的」なものは何とかそれなりに書けるようになるものだと信ずる。「芸術家は二代、学者は一代」と言われるのも、それを暗示している。我々指導者が学生にもとめるのは、文学的な「文章力」ではなく、評論的な「文章力」である。

だから、授業の前後に課題レポートを書かせるのはもっとも効果的なのである。感想文として、まずは長く書けること。次に根拠をもって結論を導くような、理論的な評論文に「添削」により導くのである。学生にとって、『練習帳』だけでは無理といったのは、『練習帳』の中身ではなく、その実践性にある。

9. 課題文の読解から評価へ

授業で行うとしたら、「課題文」を与え、その要旨をまとめることから始めるのが適当だろう。この点は『練習帳』のやり方に賛成である。次に、まとめた要旨について、自分の見解を述べることで、つまり「評価」へとつなげていくのだ。「課題文→よみ（読解）→読解のまとめ（メモ）→評価のまとめ（メモ）→全体の構成（メモ）→かく（文章化）」という流れが想定される。

私は、現代の大学の教師の役目は何かと、よく考える。最近の教授の役割は、研究者よりも教育者に偏っているようだ。本来からいうと、誤りのような気もする。しかし、最近の大学生事情を考えると、やむをえないのかもしれない、と考えるようになった。

学生によい教育をしてやるのが重要なのだ。では「よい教育」とは何か、と問われれば、教員の数だけ回答があることだろう。また、私個人でも、場合により回答は変化する。複数回答が存在する。だが、本稿での回答はただ一つ、「役に立つ」ということである。「役に立つ」とは、もちろん、世の中に出て、社会人となって「役に立つ」ということである。お叱りを覚悟で極論すれば、就職活動に「役に立つ」ということになる。

それには、教師の御託を並べることなど、何の意味もない。繰り返すが、私は、どの授業でも必ず授業開始前と、授業開始後、に各10分程度を用いて、授業内容に関わるレポートを書かせる。用紙に目いっぱい記せば、500字程度がかける。これを10分で満たすのに、普通の学生にはかなりの訓練がいる。最初3行だったものがDをもらい、発奮し、何とか努力が実り、Aに至ることがある。書くほうも大変だが、採点するほうも大変である。目いっぱい書いてもテーマからずれていればDとなることもある。

受講生は、よいレポートとは、適度な分量が必要だが、それだけでもダメだと思い知る。またテーマに沿っていても、客観的な姿勢がないと、Aにはなれないことも思い知る。その繰り返しから、世の中でほぼ通用するようなレポートがやっと書けるようになる。

中には最初から最後まで3行しか書けない、というか、書かない学生もいるが、それはそれで腹を立てないようにしている。そういう学生でも、とにかく、「書け」と言われて、恐怖感は抱かないだろうからである。

10. 「文章」という科目の目的

「文章」という科目ならば、「文章が上達する」ことが目標、つまり、教師側からは「上達させる」、学生側からは「上達する」、ということだと考えるのが常識のようだが、それは建前だろう。年間通しての授業ならまだしも、半期、セメスターで「上達」などとは、所詮無理な話かもしれない。もしも、授業が「演習」ということなら、まだよいが、これが「講義」という形をとれば、お手上げに近い。

では「文章」の本来の目的は何か。本音で言えば、それは、まず、正しい「文」が書けること、次に、「文章」を書くのに抵抗感をなくすことだと考える。後は本人が努力して「文章」が上達するような「きっかけ」を与えてやること、それが大学の「文章」という科目の限界であり、あるべき姿だと考える。

これが私の、学生にレポートを課す本音である。

11. 「文章」から「会話」へ

「文章」がうまくなれば、「会話」もより高度になる。逆に「会話」がうまいからといって、それにより、「文章」がうまくなるわけではない。

日本語の本来は、「やまとことば」である。「やまとことば」は、哲学など思想を研究する学問には不適であるというようなことを耳にしたことがある。それは、文字を前提とする言語と、文字を持たない言語との相違であると、私は考えている。

日本語は漢字という文字を輸入し、初めて会話を文字として記載することができた。それにより、高度な思想へと文章力を伸ばしていった。「会話」だけでは高度な思索は、所詮無理であろう。学生についても同様である。しっかりした文章は、しっかりした会話に結びつく。「文章」という科目は、ただ「文章」の上達のためにだけあるのではないとらえておきたい。

12. 「会話文」と「文章語」

先にも類似のことを述べたが、何でもいから書ければいい、というのは初期の段階で、そう教えつつ、わからないように高度の段階に導くのが、「文章」指導のポイントである。

「会話文」と「文章語」というのは、所詮別の世界のものだということを、教師が認識すること、それを学生に知らしめることこそ、必要なことである。

それもただ口先だけで講義してもあまり効果はない。繰り返すが、それを知らしめるのはひとえに、書かせ、添削する、その作業を繰り返すしかない。

とくに文字が本来もてなかった日本人、その流れをくむ日本語には、その理解が必要なのである。

日本語は「やまとことば」として存在していたが、それは古代、空中をとんでいた。それを文字として、とどめたのは、外来語の「漢語」のおかげである。それにより「音」を習得し、「訓」を獲得し、「仮名」を生み出した。訓読文も加わり、日本語の文章が成立した。

「むかしばなし」は語られていた。その語られていた段階から、記載されるように進展するとなれば、それはもう「会話文（会話語）」ではなくなる。記載された段階で、「文章語」へと性格を変える。

『源氏物語』は「和文体」であるというのは、一面本当で、一面ウソである。紫式部の漢語力は相当なもので、『源氏物語』には当時の外国語であった漢語があふれんばかりに記されている。漢語なしには『源氏物語』の「もののあはれ」は描けなかったと確信する。

「文章」を学ぶ意義は、「文章語」を学ぶところにある。世の中は「会話」で事足りるなどと考えているあさはかな学生には思い知らせてやるのがいい。

そのために、実は、テキストとして、『練習帳』はとてもよい要素をもっている。そういった「文章」上達への教養、文化にあふれている。それは、大野氏の包容力であり、実力である。本稿は「批判」と銘打ったが、あえてテキストとして使用するのには、そういう評価を実はしているからである。

『練習帳』に「お茶を一杯」というエッセイがある。大野氏の、志賀直哉が「日本語をフランス語にしまえ」という主張に対する見解が大好きである。それを掲げて、本稿のまとめとしたい。

おそらく彼は『源氏物語』など読んだことがないのでしょう。志賀直哉には「世界」もなく、「社会」もなく、「文明」もありはしなかった。それを「小説の神様」としたのは、大正期・昭和前期の日本人の世界把握の底の浅さのあらわれであるでしょう。（『日本語練習帳』109頁）

※本年度『人文学フォーラム』ならびに本『学科報』にも「文章」という科目に関連する論を載せている。あわせて参照いただければ幸いである。